

薬師寺境内の調査

—第476次

1 はじめに

本調査は、防災施設の設置工事にともなう事前の発掘調査である。調査区は、金堂の南面と西面の計3カ所に設定した(図199)。調査面積の総計は約65㎡、調査期間は2011年1月17日から同年2月25日である。調査区の規模はA区が東西1.6m、南北12m、面積19.2㎡、B区は東西1.6m、南北12m、面積19.2㎡、C区は東西15m、南北1.8m、面積27㎡である。

2 層序と遺構

A 区

基本層序は、現地表下に厚さ40cmの現代造成土があり、堆積層、遺物包含層、整地層、地山とつづく(図201)。堆積層と遺物包含層は締まりのない粗砂層で、度重なる洪水によって形成されたものであろう。遺物包含層には15世紀中頃から16世紀中頃の土師器や瓦質土器が含まれることから、この層の形成時期もこれ以降となる。

遺構面の標高は59.80～59.90mで、南北の高低差はなく平坦である。

石敷SX2990 粘質土の整地土層上に径15～40cmほどの河原石を据えている(図200)。石が残存していたのは調査区南半部だけであり、そのほかは石の抜取穴を検出した。石敷は調査区全面にひろがっていたことになる。石



図200 A区石敷SX2990検出状況(南東から)

は地面から10～20cmほど突出し、石の間隔も密なところとまばらなところがみられる。石敷の上面は必ずしも平坦面ではなく、稜線を上面にしたものもある。

遺構面を形成する整地層は少なくとも3層に分けられる。上層は締まりのある褐黄色の粘質土、中・下層は青灰色の粘質土と粗砂の混合土に炭が混じる。整地層からは古代の瓦片が少量出土した。

調査区南半部では、整地層の下、標高59.30mあたりで砂礫に粘質土がまじる層(地山)に達し、地下水が湧き出る。調査区北端では標高59.25m以下にもよく締まった粘質土が続き、檜皮が出土した。ここでは地山を確認できなかった。

B 区

基本層序は現地表下に厚さ40～50cmの現代造成土があり、第1堆積層、上層遺構面、第2堆積層、下層遺構面、整地層とつづき、地山に達する。第1堆積層は粗砂層で、数回にわたる洪水層である(図201)。

上層遺構面の標高は60.10m前後である。

井戸SE2991 平面円形を呈し、上下二段掘である(図202)。上段の穴は径2.7m、深さ0.75m、下段掘方は径1.0m、深さ0.7mをはかる。上段の井戸枠は壊されているが、三和土に似た材質の井戸枠が埋土に^{たが}投棄されていた。下段掘方の上端と下端には竹製の箍が残っており、木桶を据えていたのであろう。下段掘方は細砂の透水層(地山)を掘り抜いている。井戸の埋土からは瓦質土器や近世の陶器片などが出土しているため、近世以降に廃絶したと考えられる。

溝SD2992 井戸SE2991の北西に取り付く溝で、溝底は

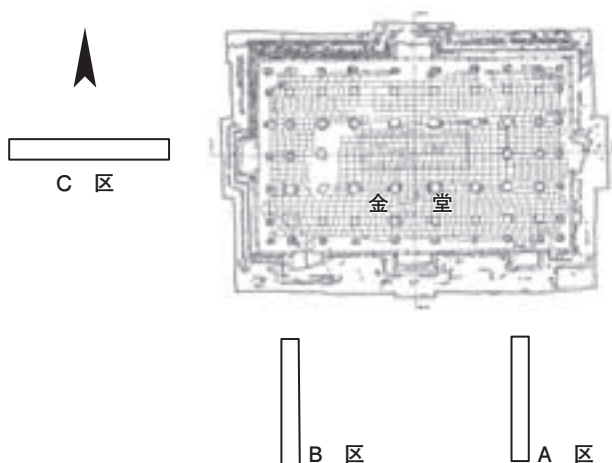


図199 第476次調査区位置図 1:700

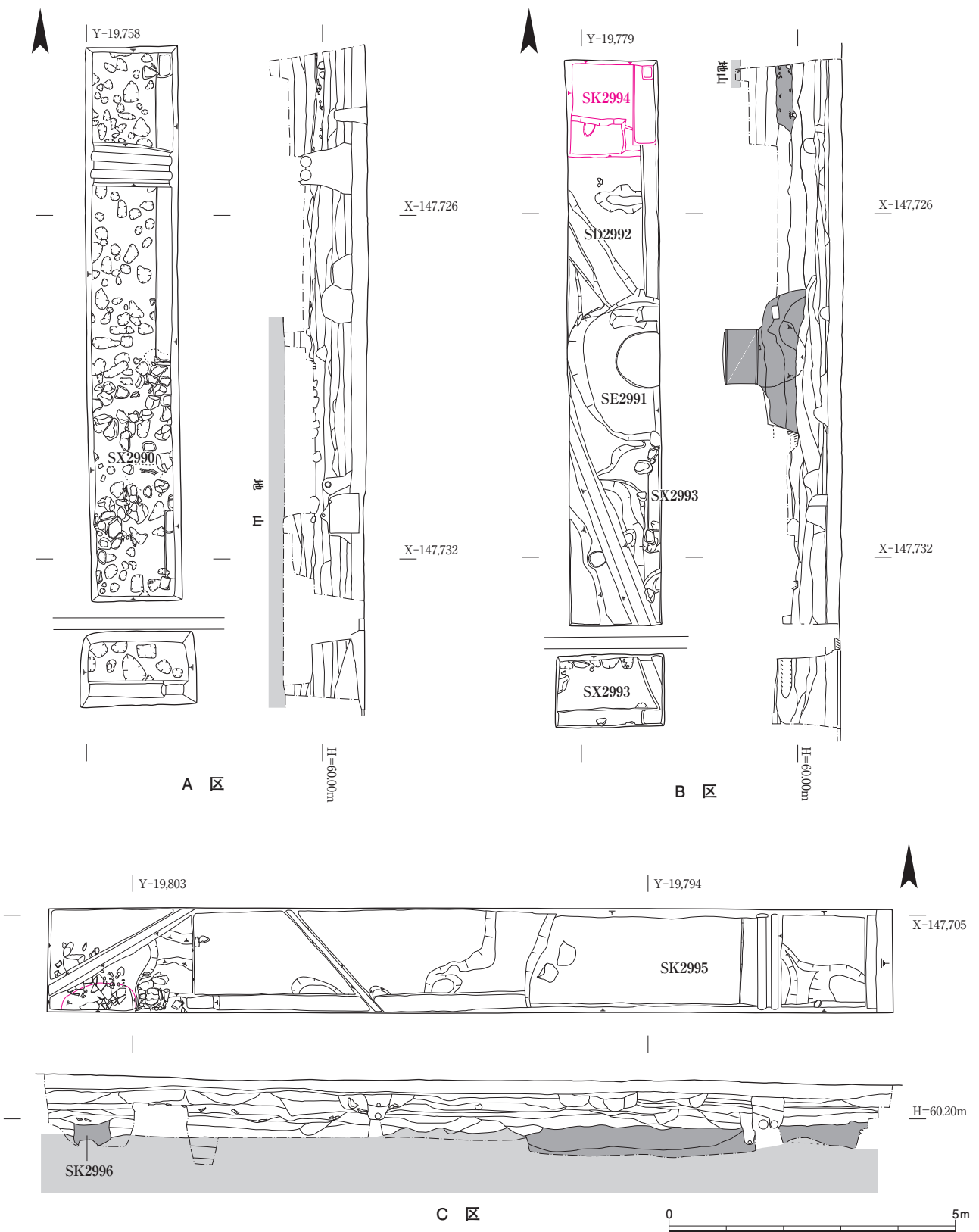


図201 第476次調査遺構平面図および土層図 1:100

わずかながら北西に向かって低くなる。井戸の排水施設であろう。この溝は1度掘り直しがみられ、下層の埋土からは瓦器片が出土している。

上層遺構面を形成する第2堆積層は、締まりのない均質な粗砂層で、洪水により堆積したと考えられる。この層には14世紀前半頃の土器片、室町時代の瓦片が含まれていた。下層遺構面の標高は59.90m前後である。

石敷SX2993 調査区南半で検出した。径20～30cmの自然石あるいは石の抜取穴がみられる。

土坑SK2994 調査区北端に位置する。深さは30cmほどで、埋土には多量の瓦片や、奈良時代から11世紀末頃にかけての土師器片が含まれていた。下層遺構面を形成する整地層は4層に分層できる。いずれも粘質土に少量の細砂を含む土で、よく締まる。全体にグライ化している。少量ながら瓦や土器片が含まれていた。標高59.00mで細砂の地山（透水層）に達する。

C 区

基本層は現地表下50～60cmまで、現代造成土や近代以降のゴミ穴や整地層などがあり、旧地表面に達する。つづいて遺物包含層、下層遺構面、整地層、地山となる（図201）。旧地表面の西端には石組をとまなう施設が検出された。この上に堆積するゴミなどからみて、近現代まで



図202 B区井戸SE2991完掘状況（北西から）

露出していたと思われる。

遺物包含層は厚さ30～40cmほどあり、砂質土ないしシルトを含む砂質土である。近世の土師皿や陶器片、白磁片などが含まれている。

遺構面は標高60.00～60.20mである。西がやや高い。

土坑SK2995 調査区の東半部で検出した瓦の廃棄土坑である。東西長は6mを超え、土坑の東端は調査区外に続く。深さは0.5mで、土坑底部は青灰色細砂の地山に達している。粘質土の埋土からは多量の瓦片と、金銅製垂木先飾金具などが出土した。

土坑SK2996 調査区西端で検出した穴である。径0.6m前後、深さは40cmをはかる。埋土には瓦片を含み、穴底には径30cmほどの自然石が据えられていた。

遺構面の下は厚さ20cmほどの砂質の整地層があり、地山は細砂とシルトの土層である。

3 遺物

瓦 類

ここでは、B区のSK2994とC区のSK2995で瓦がまとまって出土したので、以下に報告する（図203）。

B区SK2994からは軒丸瓦が8点、軒平瓦が3点出土した。5は平安時代中期の軒丸瓦、13は薬師寺258型式（以下、奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告』1987の型式番号にしたがう）で、瓦当上縁を面取りし、瓦当から13cmほどのところには幅7cmほどの範囲を棒状工具で強くナデつけた痕跡がある。段顎で、顎後端部から平瓦部凸面にかけてヨコナデ調整する。時期は平安時代後期にあたる。15は凸面にタタキのある平瓦である。鎌倉時代の瓦であろう。

C区のSK2995からは、軒丸瓦60点、軒平瓦56点出土した。1は6276Aa、2は6276Ab、3は6276E、4は6304Eでいずれも創建期の瓦である。6は型式不明だが、平安時代中期ごろの瓦、7は薬師寺38型式で、平安時代前期に位置づけられる。

8、9、10、11は6641G、H、I、Kで、凹面瓦当よりをヨコナデし、段顎である。いずれも創建期の瓦。12は薬師寺246型式で、平瓦部凸面はヨコ縄タタキをほどこす。平安時代中期の瓦である。14は平瓦で凸面は粗いタテ縄タタキ、凹面には円形に×字の刻印がある。

SK2994、SK2995とも古代の土器片が出土しているが、

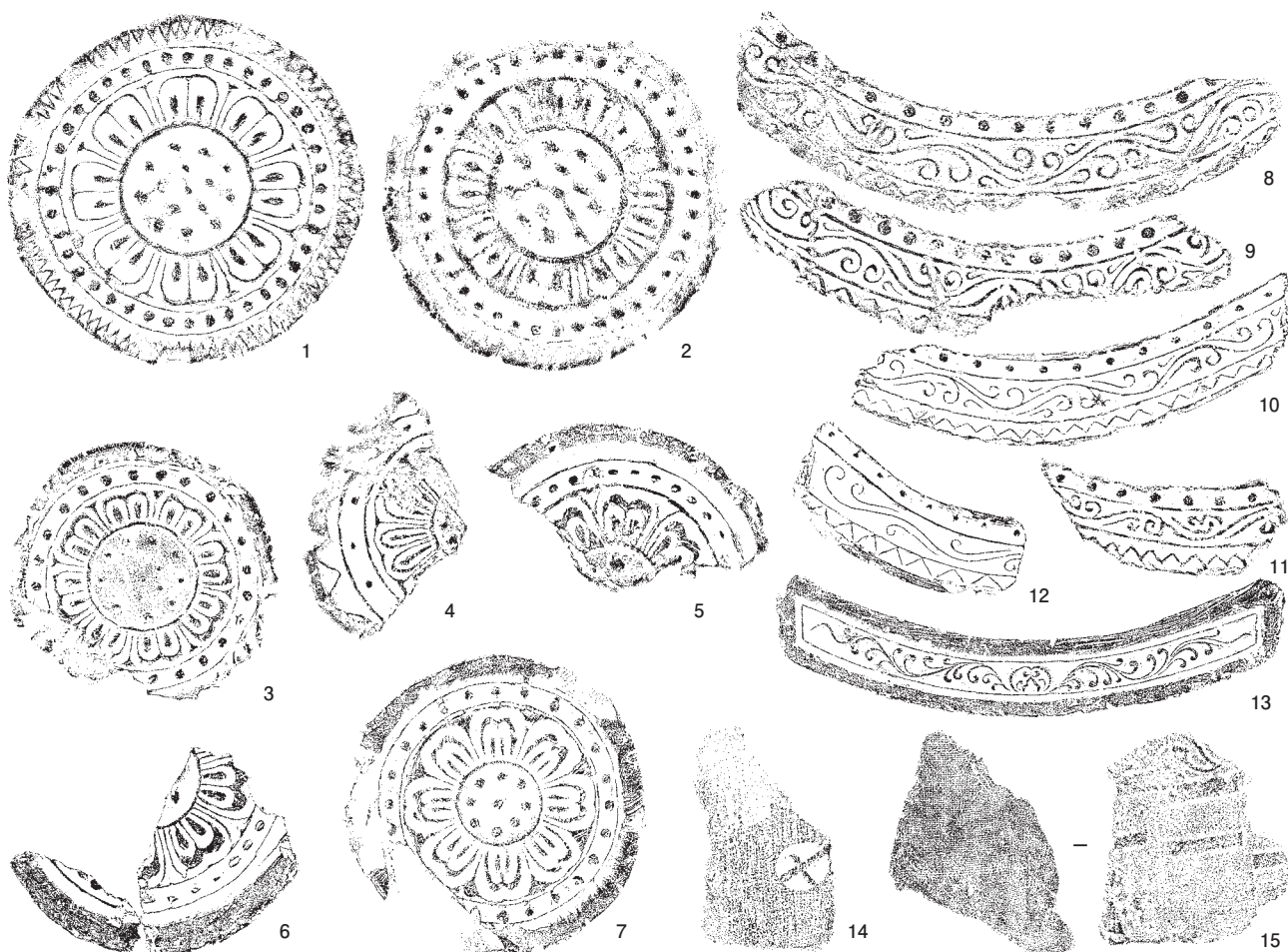


図203 SK2994・SK2995出土の瓦 1 : 4

詳細な時期がわかる資料はない。

(今井晃樹)

金属製品

SK2995から金銅製垂木先飾金具が1点出土した(図204右)。金銅製垂木先飾金具は、縦5.9cm、横4.7cm、厚さ0.4cmの断片であるが、復元すると全体は方形で、文様は対葉花文と考えられる(同図左)。全体に金箔がはられ(網掛け部)、毛彫りによる輪郭線は見られない。同種のもは、薬師寺講堂、金堂、西塔跡からも出土している(前掲『薬師寺発掘調査報告』「金銅製品」)。このほか、同遺構から鉄釘片が2点出土した。出土位置から金堂所用の垂木先飾金具と考えられる

(芝康次郎)

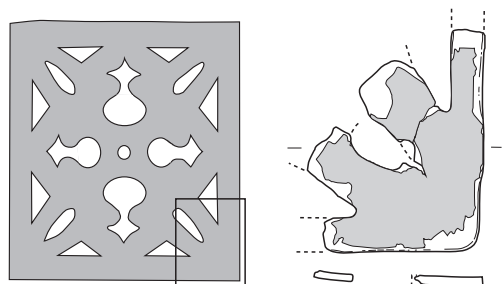


図204 金銅製垂木先飾金具 1 : 2

4 おわりに

石敷SX2990とSX2993は、検出面の標高や整地層の状況が一致することから、同時期の遺構であろう。整地層と地山との間には遺構はみられないことから、この石敷は薬師寺創建期の遺構であると考ええる。同種の遺構は、興福寺金堂前庭にもみられる。

土坑SK2994の南端は金堂基壇縁から約10m、同SK2995の西端は基壇縁から約15mの距離にある。位置から考えて、金堂の瓦を廃棄した土坑であろう。金堂の罹災記事をみると、創建後、最初の罹災は文安2年(1445)で、大風で金堂が倒壊したが、すぐに立柱をおこなっている。その後、享禄元年(1528)には焼失している。SK2994、SK2995から出土した瓦は創建期から平安、鎌倉時代のものであり、埋土には火災をしめす焼土や炭化物はみられなかった。したがって、文安2年金堂倒壊時の瓦を廃棄したものと考ええる。

これまで金堂周辺の状況については不明であったが、創建時に金堂南面に石敷が展開していたことがあきらかになった。この石敷の範囲確認やその機能をどのように考えるのが、今後の課題となろう。

(今井)